

'82年度第3期

テーマ

『冬をいかにむかえ撃つか!』

今週は 越冬の歴史

その1

夜間学校デス

— 発行所 —
釜ヶ崎夜間学校
西成区萩の茶屋2-18-18
喜望の家 気付
06-1647-3946
毎週木曜ワじより

昔(36年当時)は

二のようになんて闘ってきた!

これまで越冬はどのようになんて闘ってきたか知り、今越冬のあり方をさぐる……。

喜望の家・集会室・夜7時より

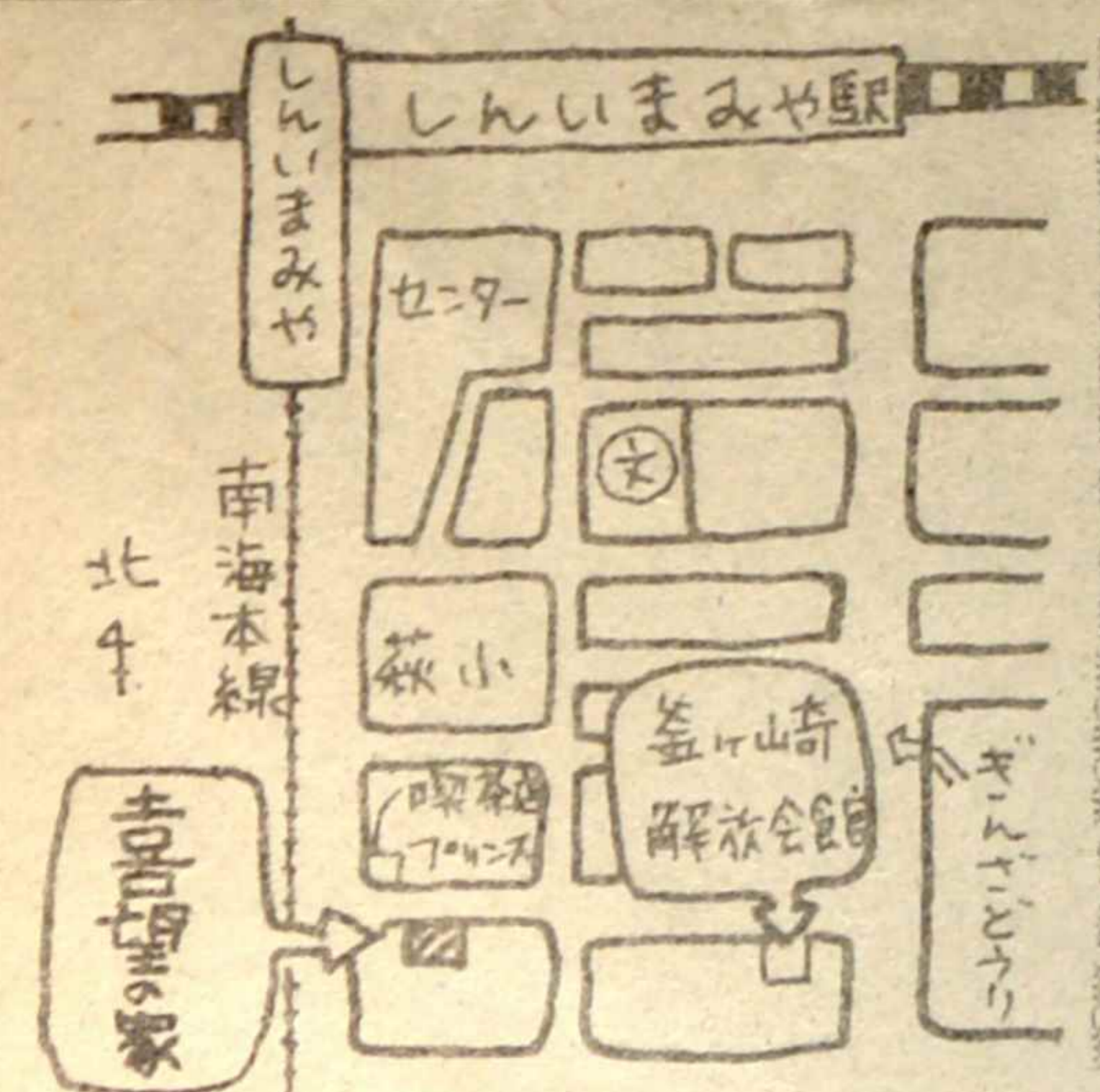
釜ヶ崎ではじめて労作者自身の手で、越冬斗争が闘われたのは、36年の暮から37年にかけての冬だった。36年のあの歴史的な、第一次釜ヶ崎大暴動の後、9月に、釜ヶ崎で始めこの組合、「全日自労釜ヶ崎分会」が結成された。

この「全日自労釜ヶ崎分会」が中心になって大阪府労働部に、越冬の要求を出し、その結果、テントを3張りかちとった。このテントを三角公園に張り、街頭カンパで「雀さえも帰る宿があるのに、俺達には帰る寝ぐらがないし

と訴え、その金で布団を借り、「団結汁」を炊いて皆で食べたということだ。当時思想的核になったのは、「俺たちは現象的には社会からハミ出したとしようもない人間のように見えるが、労働によって立派に社会に貢献しているのだ」ということであつたと言う。

この釜ヶ崎ではじめこの越冬斗争は翌37年におしくも「全日自労釜ヶ崎分会」が解散してしまつたので一回しか行なわれなかつた。

しかし、37年の暮には、年を越せない仲間、約300人が西成署に押しかけた。あわてた警察や行政は、急ぎで自強館に宿泊を依頼し、廊下にまで布団を敷いて寝た



と言う。それからもう20年も過ぎるが、1970年以來闘われ続けてきた。越冬斗争の原点はここにあり、また全てが収約されている。今も俺達にとつて、越冬は古くて新しい大きな問題だ。日一日と年の暮が近づく。今年我々はどのようになんて冬をさしてアブシ状況を生き抜いていくのか。一人一人にとつて大きな問題だ。共に考えよう!

今年で冬の越冬も3回目になります。参加したことのあ
る人も、ない人もそれぞれ、
冬にたくをしなければなら
ない季節になってきました。
なぜ越冬をするのか、本当に
必要なんだろうかと、もう一度
越冬の意味を考えておようと
いうことで、さまざまな意見
がだされました。

はつきりと、越冬は必要でな
いという人の言い分は二
つです。
★青カンをしている人の中には
認定をもらうと、バクチに使
つてしまい、金がなくなると、
他人にたかっつて酒を飲んで青
カンをしているだけや。
★自分で食へていかなあかん

前回の報告・第三期第五回
テーマ
やはり越冬は必要やけど

なと思ったら、飯場にてきど
へでも行ったらええのに、こんな
だらしない連中な人が救う必要
はないんや。
★認定やギャンブルで生活をして
困ってる人は、臨泊や団にまか
せておいたらええんや。
★死にたいやつは、ほっておい
てもたいしたことはない筈や。

現在、冬の労働者はたい
二万人で、毎年センター前
のフロンで寝る人が多い時で二
万人、全体の青カンは三百
人です。年間の行路病死者は
約三百人です。
越冬のはじめのころから、二
人の死者もたすなうしという
スローガンがずっと続いている。

越冬は行われてる人とちやう
かという意見から、さっきの越
冬不要論についての反論がだ
されました。
★個人がしつかりしていればい
いということでは、釜の問題は
すべて、個人が心かけの問題に
なってしまう。
★仕事を捜しても見つからんと

アブレでダンボール集めをず
と続けていると仕事にありつい
てもまとともに体が動けへんよう
になつてしまつてる。
★日本という国が釜のような所
を踏み台にして肥え太つてきた
んや、そのシロ窗せが、青カ
ンに行路病死になつてる、そこを
見失つたらあかん。

★年末年始に南港で臨泊がでる
けど、本当に必要な人が入つてる
んが疑問やし、あんなへんご所
は不便で自由がまかん、入つてる
人けつして満足してないと思う。
★毎年、府や市に経核患者のベッ
ド確保等の要望を出してはるけど、今
然をまよらん、行政を動かす力が
ないのは問題やけど、基本は、釜の

労働者自身が、越冬の問題を想
つていくべきや。
★従来、越冬のバッテリーはパト
ール、布団、医療費の飛
行、ビラまき、もちつき、ソフトボ
ールが、越冬の内容として適当
か、支援の人の迷い(労働者は支
援をどうみてるのか)も含めて見直
す必要があるとの意見がでました。